

材木屋とエコ 環境 省エネ(第68回) 新緑パワースポット探しの旅 「深大寺散策」

(株)コバリン 奥澤 康文

5月3日(水)、早朝から穏やかな天候に恵まれ、東京都調布市にある深大寺へ出かけた。JR大宮駅から新宿経由で中央線の三鷹駅で下車後、路線バスを利用し現地へ。夫婦で自宅から片道約2時間のブラブラ日帰り旅となった。普段は旅行に行くことがないので、新緑の武蔵野を満喫した。

【縁結びの寺、深大寺】「深大寺と言う名は、水神の深沙大王に由来しており、奈良時代の天平5年(西暦733年)に、満功上人が開山したといわれている。深大寺に伝わる『縁起絵巻』によると、満功上人の父福満と、ある貴族の美しい娘が恋に落ちたが、娘の両親の反対にあって二人は仲を裂かれ、娘は湖に浮かぶ小島に隔離されてしまった。そこで、福満は、水神の深沙大王に祈願したところ霊亀が現れ、彼を娘のいる小島へ連れて行った。このことを知った娘の両親は、二人の仲を許した後、満功上人が生まれた。上人は父の、『深沙大王を祀って欲しい』と言う願いによって出家し、法相宗を学び、天正5年に寺を建てた。その寺が『深大寺』である」と縁起絵巻は伝えている。この恋物語により、深大寺は縁結びの寺として有名になったと言うことです。



深大寺そば400年余の歴史。江戸時代の『新編武蔵風土記稿』に「極めて絶品」と紹介。又、三代将軍徳川家光公が鷹狩の途中に立ち寄った際に激賞したとの諸説あり。



境内にある、「なんじゃもんじゃ」の木。雪の様に白く美しい花が有名で、これを目当ての観光客が多い。正式な名前は、「ヒトツバタゴ」(モクセイ科)

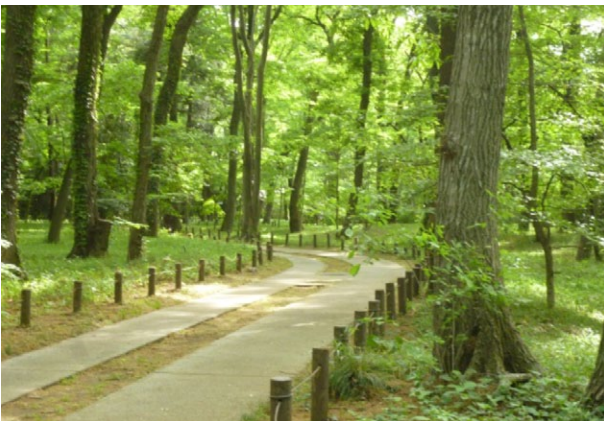


深大寺付近は、昔から稲作に不適な土地柄で、蕎麦で生計を立てていた関係でそば屋が多いという。約30軒のそば屋が密集し、「一休庵」で昼食。



完全自家製粉の石臼挽きの手打ちそば。ケヤキの一枚板のテーブルです。どこも昼時で満員御礼。20年前に行った、会津の喜多方ラーメン村を思い出しました。

【神代植物公園】私は65才以上で、半額250円。悲喜が入り混じり複雑な気持ちになりました。



深大寺に隣接する「都立神代植物公園」へ。武蔵野の面影残る散歩コース。クヌギ、ナラ類が多く、目を閉じ深呼吸をすると、新緑の薫りが心地よい。



元々は都の緑地苗圃。戦後、神代緑地として公開。S36年、現在の名称に改め都内唯一の植物公園として公開。面積は、488,196㎡ (=14.8万坪)



立派な温室設備もあり、園内には、約4,800種類、10万本の株、樹木がある。バラ園、ツツジ園、梅園、ハギ園を始め、種類により30ブロックに区分。



年間を通じて、花を観賞できる様に多くの植物類が配置され何時行っても楽しめる。散策と植物観賞は、安上がりの健康法だと思う。



H27年、南米チリの国立ビーニャ・デル・マル植物園から送られたチリ原産のものを展示。因みに、チリは南北4,200km、東西200kmと細長く、地形・気候も幅広い。面白い形のサボテン類は、花も美しく興味深かった。



温室の広さ、2,656㎡ (=805坪) 内に、熱帯花木室、ラン室、ペゴニア室、熱帯スイレン室、小笠原植物室、乾燥植物室がある。図は食中植物で、ハエ等の昆虫を餌に成長する。実際の小笠原島に行ってみよう。

年間を通して花を見せるには、約40種類の植物、樹木が配置されている。これだけ整備するのに長い年月がかかったはずで、植物好きの一人としては、今後はたまには訪れたい。



牡丹、シャクヤク類も大輪の花が見事。生前の父は花や盆栽好きが高じて、畑を植物園の様にしてしまい、村でも評判の庭になっていたのが懐かしい。



満開を過ぎた、つつじも咲いていました。当時は、実家の庭にも沢山あった。私は父の様な器用さはないが、植物や盆栽類を見るのは好きです。



ネモフィラ。茨城の海浜公園は広大で有名ですが、この数鉢も目の覚める様なブルーがきれいで印象的。



藤の花。周辺にきれいな花が多すぎて、藤の花が目立たない。それでも独特の雰囲気有。

【竹藪の筍】毎年、5月の連休に散策するが、付近の竹藪の面積が狭くなっているのが残念。



竹林の中を時折風が通り抜ける。半世紀前、竹藪はどこにでもあったが、今では少ない。残念だが当たり前の風景が消えて久しい。薫風が心地よい。



今年も沢山の筍がニョキニョキと顔をのぞかせている。成長が速く、一晩で1mも伸びることがあるという。植物の力強さを感じる。

【メタンハイドレート】5月4日(木)、NHKテレビ。愛知県・三重県沖の水深1,000mの海底約350m付近からメタンハイドレートからガス取り出しに成功した事を知った。4年前の試掘は世界初であったが、機器のトラブルにより1週間で中止。しかし、今回は1ヶ月間継続すると言う。様々な課題をクリアしなければならぬが、数年以内に実用化に向け挑戦すると言う。当然、諸外国も必死で独自の採掘を繰り返している。今後もこの種の前向きなニュースを注視したい。

2017年5月7日(日) 記



深大寺の「銅造釈迦如来倚像」(国宝)
出典：調布市観光協会